

# 連合赤軍 50 年に考える

2021 年 12 月 6 日 高原浩之(元赤軍派政治局員)

連合赤軍事件から 50 年が経過した。改めて責任と償いを表明しておきたい。

## (1)連合赤軍事件の最大の原因は赤軍派路線にある 最大の責任は赤軍派政治局にある。

武装蜂起・革命戦争を実行しようとした。それは誤っていた。それが事件の最大の原因である。最大の責任は赤軍派政治局・7名にある。

「第1に無念にも殺された同志に謝る。第2に不本意にも他人を殺して生き残る立場になった者にも謝る(同時に殺された者の遺族の感情に配慮した言動を要求する)。第3に傷ついた多くの赤軍派関係者の全てに謝る。」(2018 年3月「塩見お別れ会」で表明)

「私にとって赤軍派は後悔と贖罪である」(同)。それに衝き動かされてずっと考え続けてきた。スパンが長くなれば、考えも広がり深まる。運動と闘争に何か役立つだろうか。

## (2)主観主義はどこからきた 社会主義革命の原動力はプロレタリア階級の階級闘争

現実の主客の条件に合わない武装闘争方針を維持しようとして追い詰められ、最後は個人の主観的な決意主義だけに頼った。それが「共産主義化」であった。

### ①マルクス・レーニン主義の歴史性 毛沢東思想・中国文化大革命 連合赤軍

連合赤軍事件は中国の文化大革命の崩壊に連なる(カンボジアのポルポト政権の崩壊も一連)。ロシア革命以降の国際共産主義運動には、現代修正主義とそれに反対する革命派(代表は中国共産党)が存在していた。1970 年代、その革命派が観念論の主観主義で破綻した。この主観主義は、マルクス・レーニン主義がその歴史性からして内包していた。

ドイツ(1848 年)もロシアも中国も、全てブルジョア革命に直面していた。資本主義の発達は遅れていた。プロレタリア階級が革命の主導権を握り、革命を徹底して社会主義革命へ発展させる。二段階連続革命である。それを達成するのがプロレタリア階級のヘゲモニーであった。実践的政治的には「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」「人民民主主義独裁」、哲学的には弁証法的唯物論の「主観的能動性」である。

この「主観的能動性」が、中国の社会主義革命=文化大革命で、主観主義に転化した。国家と社会を官僚が管理し、官僚制国家資本主義化する(それがソ連)。官僚主義に対して人民大衆は反発した。「私心と闘う」などではなく、労働者大衆が官僚を統制し、やがて取って代って自主的に管理する(それが社会主義)、そういう労働者階級の階級闘争を持続戦で組織すべきであった。それができず破綻した。

毛沢東思想は官僚制国家資本主義の生産関係の批判が弱かった。革命はブルジョア革命に終わり、官僚制国家資本主義化した。言わば、主観的能動性が資本主義化の唯物論的必然性に飲み込まれた。

### ②「資本主義批判」でマルクス主義を学ぶ

赤軍派は小ブルジョア急進主義と主観主義を極限化した。日本資本主義に起因する人民闘争に内在的に依拠せず、ベトナム民族解放闘争と中国文化大革命に外在的に連動して革命を実行する。第二

次ブンドの「過渡期世界論」「三ブロック階級闘争の結合論」「攻撃型階級闘争論」はこう帰着する。学生運動に依拠するだけの武装蜂起・革命戦争方針であった。

連合赤軍事件後、総括として「資本主義批判」でマルクス主義を学んだ。社会主義革命は資本主義における生産関係と生産力の矛盾を反映する、ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の階級闘争を原動力とする。

その後、新左翼全体が、党派的後退と崩壊はあったが、労働者「下層」の問題、民族・女性・部落などの差別の問題に取り組み、小ブルジョア急進主義を清算し、労働者階級と人民に依拠する方向に進んだ。これが 2015 年の反安保法闘争と今日の人民闘争になる。

### ③グローバリズム 21 世紀は「ルネサンス」された社会主義革命の時代

1970 年代は世界史的転換点であった。アジアは民族解放を達成し、後発資本主義が発展し、中国は帝国主義化した。先発資本主義のアメリカ・西ヨーロッパ・日本は金融化した。覇権闘争と戦争、地球の自然環境の破壊、格差拡大と貧困蓄積、民主主義破壊と国家的強権など、世界資本主義の矛盾と危機が深まっている。多くの国々が直接的な社会主義革命に直面している。プロレタリア階級と人民の闘争も広がり深まる。

社会主義革命の内容も広がり深まる。言わば「ルネサンス」。労働者階級が生産手段を共有するだけでなく生産を自主的大衆的に管理する、人間社会が地球自然と持続可能に共生する、などなど。戦術的には、機動戦を準備し支える陣地戦=対抗社会が重要になる。そこに 20 世紀における革命派の主観主義的破綻は教訓化されるだろう。

### (3)革命党とプロレタリア階級独裁の問題

連合赤軍事件はスターリン主義の「大粛清」に連なる。大小はあるが、党の指導が支配に転化した。新左翼には「対革マル戦争」の問題もある。革命の原動力の問題を解決し人民に依拠しても、革命党の問題を解決しないと革命はない。内ゲバとリンチを貫くのは「党の絶対性」である。それは「神話」である。その払拭が内ゲバとリンチの清算につながる。

#### ①プロレタリア階級独裁は一党独裁ではない 多党制と共闘になる

一党独裁は、実は官僚制国家資本主義における官僚ブルジョア階級の独裁に合致した制度である。ソ連と中国で両者は一体的に確立した。ソ連では、貧農を代表するエスエル左派の離脱(根本的にはボルシェヴィキの農民指導の弱さ)があり、スターリンとトロツキーとブハーリンの路線闘争があって、その後の「大粛清」で確立した。中国では、劉少奇・鄧小平と毛沢東と胡耀邦・趙紫陽の路線闘争があって、その後の天安門事件で確立した。

1970 年闘争では、大学という小社会だが、革命を垣間見た。新左翼の八派共闘があって全共闘を指導した。その経験からして、プロレタリア階級独裁は多数の党派の共闘だろう。真理の存在は唯一絶対的だが、認識は相対的である。プロレタリア階級に依拠する革命党は多数登場する。論理的に考えても、プロレタリア階級独裁は多党制と共闘だろう。

#### ②党は目的ではない 革命の手段と道具である

革マル派は暴力的党派闘争を党是とする特殊な日和見主義である。根本には党を目的化し党の同心円の拡大を革命とみなす論理がある。批判し封じ込めるのが基本である。

しかし、専守防衛の最小限の暴力も必要だろう。であっても、「対革マル戦争=革命戦争」は、無制限の暴力になり、暴力的党派闘争の構図に引き込まれた。害が大きい。

### ③職業革命家の中央集権的組織 これは必要だろう

陣地戦に対応する革命党の組織が必要であろう。ロシアは民主主義革命であり、陣地戦は農村、農民の反封建制闘争が中心であったが、ボルシェヴィキはそれが弱かった。

しかし、機動戦、つまりブルジョア階級独裁の打倒とプロレタリア階級独裁の樹立、あるいは武装蜂起・革命戦争は必ずある。それにレーニンの党組織論は有効だろう。

### (4)犠牲者の遺族の感情に配慮してほしい

連合赤軍 50 年、事実を羅列し犠牲者の名を押し出す企画はやめてほしい。リンチし殺害する映像を見せるに等しい。総括と教訓化は理論に昇華すべきである。(おわり)